

目 次

■開催概要	拠点リーダー	高山 節也	1
■シンポジウム日程			2
■挨拶				
○開会式挨拶	浙江工商大学長	胡 祖光	6
		二松学舎大学長	今西 幹一	7
○閉会式挨拶	浙江工商大学副学長	張 仁寿	8
		学校法人二松学舎理事長	佐藤 保	9
		浙江工商大学日本文化研究所副所長	王 宝平	10
■基調講演				
○コロナブロードの開拓者 小林忠治郎・羅振玉・董康・傅增湘らの 協力者として—	二松学舎大学大学院文学研究科教授	佐藤 進	13
○鑑真僧団とブックロード	浙江工商大学日本文化研究所長	王 勇	36

■要旨集

古代分科会 1

玉篇と篆隸万象名義	白藤 禮幸	37
王仁漢籍伝来説の再検討	王 鉄鈞	38
日本書記における中国口語起源漢語の訓読	唐 煒	39
坤元録屏風詩をめぐって	後藤 昭雄	40
名は宋朝にほとぼしる—大江匡房の対外意識—	吉原 浩人	41

総合分科会

漢字字体規範データベースの構築と公開—HNGプロジェクト—	石塚 晴通・池田 証寿・岡墻 裕剛	42	
日本漢学における分類の問題点	岡野 康幸	43
朝鮮書目から漢籍交流を見る—東亞漢籍交流研究法の一つとして—	張 伯偉	44
漢文典籍の交流（訓読）	石塚 晴通	47
台湾大学図書館所蔵の珍本—その日本漢籍の源及び学術価値—	張 寶三	48
中国人が『日本漢文学史』を書くべきことを論じて	陳 福康	49

近世分科会 1

曲直瀬養安院家と朝鮮本医書	町 泉寿郎	50
比較の観点から見た「名所図会」	唐 権	51
江戸時代における中国術数・ト占書の流布と馬場信武	ハイエク・マティアス	52
『遊仙窟』中国回帰考	金 程宇	53
『文心彫龍』と『文賦』の韓国伝来についての考察	朴 現圭	54

近現代分科会 1

東文学社及びその翻訳発刊本『支那通史』と『東洋史要』について	鄒 振環	55
近代中国における日本監獄制度書物の流布	孔 穎	56
康有為『日本書目志』出典考	王 宝平	57
近代日本における修養書ブームと漢籍	王 成	60
魯迅と明治時代の日本書—『支那人気質』を中心に—	李 冬木	61

古代分科会 2

「明一伝」「七代記」の構成に関する一試論 —「大唐国衡州衡山道場釋思禪師七代記」 との関係を視野に入れて—	榊 佳子	63
渤海と日本の漢詩唱和交流について—史的視点から—	李 美子	64
古代日本の仏典注釈書に見る漢籍の引用と漢語知識	河野 貴美子	65
類書『稽瑞』と祥瑞品目—唐礼部式と延喜治部省式祥瑞条に関連して—	水口 幹記	66
東アジアにおける『剪燈新話』の受容—「冥婚」をめぐって—	張 龍妹	67

中世分科会

来日僧西潤子曇について—『鳩嶺集』所収二首制作の背景—	仁木 夏実	68
日本から見たベトナム漢文訓読	グエン・ティ・オワイン	69
栄西の入宋と『喫茶養生記』	米田 真理子	70
『五山文学論集』にみえる中日書籍交流の史料二則	江 静	71
宋代における道元の事跡資料輯録	郭 万平	72

近世分科会 2

中日書籍史における持渡書の意義について		
—『戌番外船持渡書』を例として—	周 振鶴	73
大名庭園のなかの「西湖」—江戸時代における漢籍受容の一考察—	李 偉	74
庶民の文化交流に関する研究—「寛政十二年遠州漂着 唐船万勝号資料」にあらわす食生活を中心に—	関 劍平	75
中国・朝鮮・日本の詠史楽府	沈 慶昊	76
日本開国と中国人—羅森と彼の『日本日記』—	邢 永鳳	77

近現代分科会 2

明清冊封使別集における琉球史料について	王 茵 78
明治期の日本国内における唐本流通について —岸田吟香書翰を中心に—	川邊 雄大 79
近代日本における漢籍の流入 —一文求堂・田中慶太郎の将来事業を通して—	富田 昇 80
嘉業堂蔵書の変遷と近代漢学の展開	李 慶 81
漢籍版本学及び和漢印刷史における長沢規矩也の貢献について	陳 東輝 82

付 録

参加者名簿	83
-------------	----



〔会場・華北飯店〕



〔左・佐藤理事長・高山リーダー・今西学長・
五十嵐 COE 事務局長〕



〔佐藤進先生の基調講演〕



〔浙江工商大学・本部棟〕